

地球と向き合う。情報と向き合う。私たちの生活と向き合う。

Julieta: これからある場所についての話をします。それは利根川についての話です。この話は3つの章に分かれます; 地球と向き合う。情報と向き合う。そして私たちの生活と向き合う。あなたの好きなように自由に見て回ってください。出入りも自由です。

私たちはいかにしてある場所、特に利根川を、植民地化することなく、科学的探求により表象することができるでしょうか?

私たちはいかにしてある場所、特に利根川を、植民地化することなく、社会的探求により表象することができるでしょうか?

私たちはいかにしてある場所、特に利根川を、植民地化することなく、自分たちの方法によって表象することができるでしょうか?

第1章: 地球と向き合うこと。

私たちはいかにしてある場所、特に利根川を、植民地化することなく、科学的探求により表象することができるでしょうか?

Sarah: 河川表象センター (通称: CRR) へようこそ。このような名前ではありますが、ここはそんなに大きなスペースではありません。長年のタバコの煙が黄色く変色させた壁には、地図やドロ잉、写真などがあります。そして、大きな水平の窓からはうす暗い青空、緑に囲まれた水田が広がる大地、そして暗い水の流れが見え、その水は、平地の間を前に押し進むためにはまっすぐ伸びるのが良いのか、曲がりくねる方が良いのかまるでわかっていないヘビのように流れ通っているのです。電柱や電線は家から家へ、そこから農場、そしてまた家へと繋がっています。

ここは確かに私たちが一度も訪れたことがない場所です。壁に書かれた言葉は私たちにとって未知であり、ほとんど理解できません。その代わりに、私たちは自分たちの考えやアイデアを投影することによって、この場所を当面自分たちの場所にしようとしています。そうすることによって、私たちはこの場所を認識しくつろぐことができる。

J: 「どのように理解するかは、何を理解するかを構成する」 (Barad in Neimanis, 24)

CRR は思考のエクササイズです。だから、あなたが本当だと思うことはここでは忘れてください。実際には本当ではないのですから。

S: こんな問いがあります。表象することとは、植民地化することでしょうか? ここでの「植民地化する」という言葉は; 自分たちの利益のために、都合の良い使い方、知り方、理解の仕方、所有の仕方、評価の仕方、居住の仕方、そして私物化によってその土地で本来育まれてきたものを否定する行為を意味します。

床に利根川の地図があります。明治時代初期 (1880-1886) と記されているので古いものです。私たちはその上を歩くことができます。私たちが実際にいた地点の表象の上で注意深く両足でバランスを取ります。私たちはそこに本当にいました。今ここでは、私たちは表象です。ちょうどこの地図がその地図なりのやり方でそれが表象する風景を植民地化しているように。私たちの足は、川の上で、表象と植民地化、またその2つの中間にあるものと外側にあるもの間で慎重にバランスをとっています。

この CRR という場所では、でもそんな場所はないかもしれないが、川との関係において私たちの場所を思い出します。ある人は言います。

J: あなたたちにその川について研究できる十分な時間はないでしょう。こんなに壮大でありあまるほど

豊富なものを研究するには、長い年月を要するから。

S: 私たちは頷く。彼女の言うとおりに。

水の科学的表象は、川をコントロールすることとしても知られている。

...

J: コ ン ト ロ ー ル
彼らが川を移動させたって、知ってた?

S: いいえ。

J: 川の進路を変えたんです。切って付け直して他の川と一緒にした、みたいなの。

S: 正確にはどのようにして移動させたの?

J: 正確には知らない。でも、川のコントロールは不可欠らしい。

S: あのね、川を操作するということは、川が元々もっている可能性を破壊することで、そんなこと不可欠ではない。すべての堤防は「外に住む」人間のための壁であって、川にとってはその「内側」を流れるため。

J: 動物にも影響があるでしょう?

S: ええ、そう。動物も閉じ込められる。

...

J: 洪水のコントロールを学びましょう。

S: ここにはオランダ人水工技師の写真があります。彼らは日本で河川事業に取り組んでいた(らしい)。こちらはローウェンホルスト・ムルデルといって、利根運河の建設で有名な人。リンドウは今の日本の水位の標準となっている水準原標を定めたことで知られています。そして、ファン・ドールンは日本に最初に来た水工技師です。

日本語では「オランダからの知識、学問」という意味をもつ「蘭学」という言葉があります。

J: 力のコントロールを学びましょう。

私たちだって、オランダで勉強したからそれは蘭学の一部ですよ。私たちには一通りの手段が必要だったのだから、そこへ行くのは理にかなっていただけ。とは言っても、日本人は本当に西洋の手段、あるいは助けが必要だったのだろうか? 有名な話があります。約17世紀から19世紀にかけて、日本は世界に対して開かれていなかった。そして当時、オランダ人はビジネスのための「入国」を許可されていた唯一の西洋人だった。長崎港にある出島でほとんどの取引が行われていたため、実際にはその島への「入国」で、日本国内への入国ではなかった。そしてオランダ人は、日本における西洋の知識、技術、医学や天文学を更新し続けた。

この「西洋が東洋を教える」というエピソードは、他の西洋人によって日本が開国された時に、日本は

すでに西洋へ「追いつく」ことを知っていたために、彼らは日本を支配下におくことはできなかったという結末を迎える。

S: 「追いつく」なんておかしい言葉の選択。誰がそんな風に言ったの？ オランダ大使館とか？
当時の日本では、オランダは日本を支配する立場ではなかったと言われている。そう、それでもやはり、ヨーロッパ人は優越感を感じる立場にあり、オランダ人は自分なりの「白人の責任感」というものの解釈を持っていた。彼らは日本の土地や資源には身体的にはアクセスできなかったものの、その態度は入植者そのものだった。リンドウの手紙のひとつのなかで、彼は日本での滞在を「虫眼鏡を通して見る子どもの世界」(van Gasteren e.a. 134, 146) にいるようだった、と例えている。

J: 土地のコントロールを学びましょう。

私たちのガイドをしてくれた田邊さんはある島を作りました。彼はこの島をたぬき島と呼びました。それは佐原にある利根川下流河川事務所のすぐ目の前にあります。

S: たぬきがいるの？

J: いるよ。

S: でもどうやって生きているの？

J: たぬきは泳げるし、そこにいる多くのヘビや魚、ほかの生き物を食べている。

...

S: オランダ人の話へと戻ろう。

J: でも長すぎにならないように。

S: オーケー

J: 地図のコントロールを学びましょう。

S: 日本の川はどれをとっても日本の国土だけを流れている。つまり日本では、河川の源流から海への河口までその全てを管理することができると言える。洪水は中枢であり、河川のコントロールは常に行われる(van Gasteren e.a. 101)。

J: 常に。コントロールは常におこなわれる。

資源のコントロールを学びましょう。

土地のコントロールを学びましょう。畑に水を供給するために、いつの時代も灌漑用水路建設のための複雑な工事が行われてきた。

食べ物のコントロールを学びましょう。水は米を育てるために重要です。

生産のコントロールを学びましょう。米の栽培には大量の水が必要です。

市場のコントロールを学びましょう。個人の利益のために川を調整する人々が常に存在してきました。

資産のコントロールを学びましょう。貿易のコントロールを学びましょう。常に水力工学は存在してきました。

S: 江戸時代、川は運河へと変わり、新しい運河が建設され経路が変わりました。彼らは輸送のためや、

ダムや送水路を改良するために水をかき回したのです。18世紀には、その焦点は拡張から維持へと変化しました(103)。この変化によって、大きな河川はコントロールの中心に据えられました。そしてそれは挑戦的なものでした。洪水を防ぐためには水位は十分な低さでなければならないが、田畑に水を供給するためには、それに十分な高さが必要でした。ひとたび川のコントロールが始まったとき、それは終わりのない努力となる。そしてそれは高くつく。

J: なんて時代だったのでしょ。そして今、やっと、利根川についてね。

S: えっとね————

J: 災害のコントロールを学びましょう。

S: 1882年に起きた利根川下流の洪水は、海までの大部分を破壊し、水田を利用不可能にしてしまった。その洪水は、利根川を江戸の北側へ移すという初期の計画を呼び戻した(111)。そして彼らは動かした。その川を移動させたのです。

J: でも正確にはどのようにして移動させたの？

S: 知らない。

J: 水流のコントロールを学びましょう。
利用のコントロールを学びましょう。

可動性のコントロールを学びましょう。

S: オランダ人の水工技師は利根運河の開発に努めた(123)。

J: 防衛のコントロールを学びましょう。

S: 確かに、オランダ人は治水開発で有名だったけれど、日本の景観はオランダとはやや異なります。オランダには山もなければ、自然な小川もない。時に干上がり、またある時は洪水を起こす川などないのです。1873年に日本の使節団がオランダを訪問した後、こう書いています；「日本の水をオランダの水工技術によって管理しようとした人が、『魚を取るために木に登る』かのような仕事を始めた。」と(124)。

だが、その後：

1890年6月18日、利根運河開通を記念して公式セレモニーが執り行われた。そこには、忠敬さん、田邊さん、加納さん、襦々子（ねねこ）さん、裕美子さん、古田さん、倉持さん、そしてリエッタとサラ、全員がいた。一人だけ欠けていたのはムルデル氏、このプロジェクトの建設で重要な役割を果たしたオランダ人だ。彼は故郷へ帰りたくて仕方が無かったので、運河が完成した翌日に発ってしまった。

J: これがその運河です。建設されたことは奇跡に近い。昨晚、守谷出身のミズがこの運河の建設に関する千葉と茨城の争いを教えてくれた。利根川が2つの県にまたがっているため、彼らはいくつかの事柄に関して合意する必要があった。茨城は運河を建設したが、千葉は4年に渡って拒否し続けた。オランダ人にとっては、利根運河の開発は日本における彼らの水工技術の栄光だった。そして、その技術は確実にその地域と住民へ大きな変化をもたらした。

S: とはいっても、実際のところそれは期待には添うことはできなかった。祝祭的な運河開通式の2か月後には既に大洪水がその地域を襲った。平地で培われたオランダ人の技術は結局日本の地形にはそぐわなかったのだ。そして、洪水は決して無くなることがなかった。おそらくこの偉大なる水工技師たちは、抽象的なアイデアとしてしか水を考えなかったのだろう。水を計測し、定量化し、デザインし、かき回し、改造することができる「そこにある」ものとして、起こりうる結果を考慮せずに扱った。かつてある男は、科学技術の産物としての水についての本を書き、その水をこう呼んだ; 「近代的な」水。近代的な水は社会的関係性から完全に切り離され、特定の地域にあることの意味を剥奪される(Linton, 159)。

J: 近代的な水?

S: 近代的な水。

J: 可能性のコントロールを学びましょう。
関係性のコントロールを学びましょう。
意味のコントロールを学びましょう。
精神のコントロールを学びましょう。

S: すこし、水について考えてみましょう。水だけのことを。水は私たちを取り巻き、そして私たちの内部にもあり、地球の表面の70%を覆い、人間の身体の半分を占めている。水についての解釈は何万とある: 社会的、科学的、神聖な、攻撃的、暴力的。それは資源、科学的資源、H₂O、そして水文循環の一部です。

J: 水文循環について学びましょう!

「水文循環とは、水文学においてもっとも根本的な原理である。海と地表面から蒸発した水は、水蒸気となって地球へ行き渡り、再び凝結して雨や雪となり、木々や草木に吸収され、そして地表面に流出し、土壌へ浸透し、地下水をとなり、川へ合流し、そして最終的には海へと流れ出し、再び蒸発する。太陽エネルギーと重力によって駆動されるこの莫大な水のエンジンは人間の活動が存在しようがしまいが絶え間なく続くのだ。」(Maidment 1993:1.3 in Linton 164-165)。

S: 「人間の活動の有無にかかわらず絶え間なく続く。」ということは人間が存在しなくても起こっているということ?

J: そうということ。

S: 興味深い。つまり、科学にとっては、水文循環の論理は、その循環原理が既に自然に存在していたという真実を明らかにしている、ということだけど、それを解き明かす科学者を必要としたということ?

J: そう。

S: そして、この水文循環が全ての水を表象しているということ?

J: そう。

S: じゃあ、いかなる水も科学から逃れることはできない?

J: できない。

S: そして誰しものがこの水文循環を信じている。なぜなら科学がそう主張するから？

J: そうということ。

S: そして、それが「自然」現象であると主張されているということ？ あたかも、まず自然がそのアイデアを思いついて、結果的に人間がそれを発見したかのように？

J: そう。

S: それは、全ての水を表象すると主張する水文科学それ自体が、「あらゆる状況で水を水たらしめている社会が変化する過程」から水を切り離すことを意味しない？ なにかが「常にそこにあったもの」として表象されるとき、それは普遍的なものになり、よって固有の社会的文脈を完全に消し去ってしまう。

(159-160) だよな？

問題は、どうすれば水はその科学的循環から逃れられるか？ ということ。もし、私たちが水を抽象的なものとして、科学的に表象されるものとして、さらには資源や商品として捉えることを止め、社会を構築するもののひとつとして捉えれば？ 明治時代以前は、利根川はたくさんのお名前をもっていた。地元の人々は川を自分たちの名前と呼んでいた。利根川という名前が全国的に確立された後は社会活動がなくなってしまった。

J: もし私たちが水を社会的課題として捉えると洪水は止まると思う？

S: おそらく。

J: でも、人間以外の存在の「声」をどうやって表象できると思う？ 人間が自然の「声」を代理しなければならない、「私たち」が話す言葉を持たないとされる「そこにいるもの」を代表しなければならないという推論はポスト・コロニアル的思考に由来する。

危機のコントロールを学びましょう。

S: そして、人間が川を移動させた。人間が川を移動させたって知ってた？

J: ええ。でもどうやって？

S: 知らない。

...

S: 第2章：情報と向き合うこと。

私たちはいかにしてある場所、特に利根川を、植民地化することなく、社会的探求により表象することができるでしょうか？

私たちはまだ河川表象センター、略してCRRにいます。少しまだ、タバコと年老いた人たちの臭いがします。緑に囲まれた水田が広がる大地と、その間を流れ通るうす暗い利根川はまだ、この水平に広がる窓を通して見ることができます。

...

昨日、直人が群馬の山麓で洪水が起こると、翌日に取手にその水が流れてくることを教えてくれた。こ

の水の流れは山に住むうさぎやきつねを関東平野の下流へと押し流し、人々は「銃なしで」狩りに出る。まるでキノコを拾い集めるようにうさぎやきつねを拾うことができ、夜にそれらを料理する。もちろんこれは昔の話。だけど今でも直人は洪水があると彼の娘を連れて取手のゴルフ場へ水たまりの魚を捕まえにく。食べるためではないけれど。食べるための魚はカスミ（スーパーマーケット）から。

...

J: 河童について話しましょう!!!!

瑞穂さんは私たちに『利根川図志』という本について教えてくださいました。その本はまるで利根川のお気に入りの場所全てを教えてくれる観光ガイドのような本です。18世紀中期に赤松宗旦（あかまつ・そうたん）によって書かれました。その中で最も興味深いもののひとつは禰々子（ねねこ）と呼ばれる利根川に住む河童です。本には河童にまつわるベースとなる4つのストーリーがあって、人々はこれを脚色することができます。

利根川には禰々子という名の河童がいる。
毎年、禰々子は引っ越しをして、住む場所を変える。
地元の人たちは禰々子がどこに住んでいるか知っている。
なぜなら彼女が住むところには、災いが起きるから。

...

裕美子は25歳で利根町に住んでいる。ある晴れた日、私たちは生涯学習センターで彼女に出会った。彼女は禰々子について教えてくれた。彼女は言った。「禰々子はとても悪い奴だった。」「いつも私たちをひどい目に遭わせる。」
裕美子はもう河童のことを信じてはいない。
彼女は「河童はひどい奴で、でもとても礼儀正しい。もしあなたがお辞儀をすれば、河童もお辞儀を返す。そうしたら頭の上のお皿の水が流れ落ちて、それが災害!」
裕美子はそれを可笑しいと思っている。
彼女は私たちに河童の絵を見せてくれた。
この絵は河童を捕まえる方法を表している。河童はときどき人のお尻に手を入れて、肝臓を掴もうとする。ここに描かれている人はこのお尻をおとりに河童を捕まえようとしている。
この話のねらいは、河童を人間よりも低俗なものに見せることです。ここでは、河童は利根川の比喩的表現として用いられます。人間は、洪水を引き起こす邪悪な自然としての川、河童をコントロールしようとしているのです。

田邊さんは80代で、生涯を佐原で過ごしている。彼は佐原川駅にある防災教育展示のガイドのグループの中で最年長だという。彼は70年前に佐原で起きた大洪水のことを覚えている。

S: 私は人々が洪水に浮かぶ家具や持ち物を探し回っている様子を覚えています。川には死体も浮いていた。数人の人間がロープを使って水から棚を持ち上げようとしていたが、それがひっくり返ると裏側には死体が付いていた。棚にしがみついた男の腕と足の残骸。「あれから70年が経ちました。」彼は覚えている。「日本は美しい」彼は思う。「外国の人からはよくそう言われているでしょう。だけど、彼らはここに住むことの危険性を理解していない。」

J: 彼の娘はアメリカ人と結婚した。彼女の夫はここでの暮らしの方がずいぶん良いので、自分の国には帰りたくないと言う。食べ物がおいしい。田邊さんは理解している。けれども娘の夫にはここでの暮らしに潜む危険性は、全く想像もつかない。

昨日来たさとも同じ考え。彼女は川は恐ろしくもあり美しくもあると感じている。彼女の香取の家は水位から5メートル下の土地にある。雨が降ると彼女の夫は携帯電話で常に天気予報をチェックする。彼女たちは家の屋上に3階目のフロアを造った。利根川で洪水が起こると彼女達はそこに座る。

...

「どのように理解するかは、何を理解するかを構成する」 (Barad in Neimanis, 24)

...

伊能忠敬様

お元気ですか。

佐原の運河沿いにある、かつてのご自宅を共有していただき、どうも有り難うございました。とても素晴らしいご自宅、素晴らしい場所です。誰かが、この家は共有された現実だと言っていたのですが、本当にその通りだと思いました。

今ここにお手紙を書いているのは、私たちがある問題に直面しているからなのです；利根川です。私たちはこの川が、このひとつの共有された現実が、どのように今ある姿になったのか理解しようとしています。しかしどうすればその共有された現実を図面化できるのでしょうか？

川はあちら側にあり、問題はこちら側にあります。その問題は川のサイズですが、この部屋にもびつたりサイズのサイズです。私たちはスケールの問題を取り扱っているのでしょうか？昨日、私たちは鶴見さんという、あなたのように地図を作る方と会いました。また、私たちは水工技師のファン・ドールン氏、リンドウ氏、チャヴェス氏とも話しました。また、加納さんと、子どもの頃の加納さんとも話しました。

加納さんは利根川で泳ぎ方を学んだことについて話してくださいました。彼女の自宅から5メートル先には小さな用水路があり、彼女が3歳の頃、彼女のお父さんは彼女をその用水路へ投げ入れました。彼女は自分自身でその水から出る方法を見つけなければならなかった。これは、とても大切な訓練でした。なぜならもしあなたが水のなかで自分の身が守れないのなら、それは死を意味するからです。人々は成長すると、茨城ならではの特別な泳ぎ方を学びます。それはこんな感じです：

これは「よこのし」と呼ばれています。横向きで泳ぐ方法です。

S: こんな感じ？

J: そんな感じ。横向きになって水をかくことで、体力の消費を抑えながら長く泳ぐことができる。

伊能様

加納さんのお話はその川についての共有できる現実のひとつです。しかし、彼女の話の再び伝えること以外に、私たちに何ができるのでしょうか？私たちは水に触れたことすらないのです。

私たちはとてもたくさんの人と話をしました。地質学者、歴史学者、地理学者、フィクション作家に教師、船のキャプテンに、シェフ、政治家、商売人、ですがまだわからないのです。瑞穂さんとも話しました。バスさんとも話しました。川と共に暮らし、利用する人々と川の関係をどのようにして測定できるのでしょうか？それとも、測定という言葉がすでに共有される現実をそもそも本質的に無視する科学的言語なのでしょうか。あなたならそのようなことはお分かりでしょう。表象とは、常に規模を縮小さ

せてしまうのでしょうか？あるいは、この川を表象するいくつものイメージを積み重ねることで川を増大させる過程の一部となり得るのでしょうか？

あなたは日本全土の地図を、それが到底不可能だった時代に作られました。あなたは、この場所、この共有できる現実、そしてその境界線と問題をご存知です。私たちにとって、いまだ利根川はよくわからないもので、自分たちだけで図面化はできません。ですから、私たちはこうして、あなたにとっては表象は理にかなうものなのか、とお聞きしているのです。調査し、図面化し、歩き、解釈し、そして最終的に表象されたあなた、私たちにどうか教えてください；私たちがここで取り扱っている問題とは単にスケールの問題なのでしょうか？

敬具

サラ&フリエッタ

...

S: 利根川には実はもうひとつ名前がある：坂東太郎（ばんどうたろう）。

太郎：長男という意味。

坂東：この言葉の意味は覚えていない。

...

J: 最終章：私たちの生活と向き合う。

私たちはいかにしてある場所、特に利根川を、植民地化することなく、私たちの方法によって表象することができるのでしょうか？

どうぞ、どうぞ、ご来場の皆さま、お入りください。私たちがこの川について知っていることをお見せいたしましょう。

S: 私たちはまだ、この憂鬱な河川表象センター、略してCRRにいる。ここはまだ、老人、タバコ、古紙と雨の日の日比谷線のような臭いがする。地図、ドローイング、写真、そして大きな水平に広がる窓からはうす暗い青空、緑に囲まれた水田が広がる大地、そして暗い色の水が見える。その水は、平地を前に進むためにまっすぐ伸びるべきか、曲がるべきかまるでわかっていないヘビのように流れている。電柱と電線は家から家へ、農場へ、そしてまた家へと繋がっている。

ある意味この場所では人は現実と思えることを手放さなければならない。なぜならこの場所は本当に素晴らしい場所などではないのだから。

利根川の地図はまだここにある。床の上に。私たちはその上を歩くことができる。私たちの足は、表象と植民地化、またその二つの中間にあるものと外側ににあるもの間で慎重にバランスをとる。私たちは自分の体に集中し、土地と風景のどこに立ったかを真剣に考える。私たちは本当にあの場所にいた。いまここでは私たちは表象、ちょうどこの地図と同じように、つまり地図が地図なりの仕方でそれが表象する風景を植民地化しているように。

この場所、このCRRでは、本当ではないけど、川との関係が私たちの場所を思い出させる。

ある人はこう言う：

J: 「あなたに川を研究できる十分な時間はないでしょう。こんなに大きく豊かな川は、研究するには長い年月を要するでしょう。」

S: 私たちは頷く。彼女の言う通り。

...

J: 川へ探検に行くにはどう計画したらいい? どんな装備を用意し、どんな資料を読む? どんな小さな危険があり大きな危険がある? 誰も出発のときには知らない。推測できるだけ。(Steinbeck, Ricketts, 73)

S: その探検は、水の質を理解し、物事が計測され図面化され、組織され発見される方法を理解するための科学的探究となるでしょう。ダムや橋がどのように建設され、誰がいつをそれを行ったのか。

それはまた、どのように川の逃れが多くの人々の生活に影響し、またどれだけの人が川の道筋に影響を与えたかを知るための社会的探究にもなりうるかもしれません。

それはまた、アウトサイダーの視線からの個人的探究にもなるかもしれません。風景を身体的に感じるための探検、川に沿ってサイクリングすることで川がどのように形作られるかを理解し、川が感じているのと同じ風を感じ、同じ海へと行き着く探検。坂東太郎の風景に向き合う2組の体と目。

J: ここにいくつかの問題があります:

J&S

問題1: 茨城の太平洋沿いの海岸はベルギーの海岸とまるで同じように見え、メキシコの海岸よりも汚い。

問題2: アートという枠組みのなかで問題を発掘し、ストーリーを語ることは、問題を象徴的にすると同時に本当らしくないものにしてしまう。だってねえ、アートだもの。

問題3: 私たちがどのような立場から話をしているかということ認識することが重要でしょう。だからこそ今から話す最後のストーリーの前置きが長いのです。

J: それでは、そのストーリーを話しましょう!

...

S: タナゴは小さな、小さな魚で利根川に住む魚です。加納さんはこれを食べようとしたことがあるが、あまりおいしくなかった。ともかく、今利根川に住んでいるタナゴは、本来のタナゴではなく、輸入されたコピーなのです!

J: 輸入されたコピーのタナゴは在来種のタナゴを絶滅に追いやったと言われている。在来種のタナゴも外来種のタナゴもどちらも貝殻に卵を産みつける。だけど、外来種のタナゴはその貝をすべて独占して在来種のタナゴが卵を産みつけられる貝を奪い取ってしまったみたい。

S: 典型的な話。

J: 霞ヶ浦にもタナゴはいる。しかし、この魚はただのタナゴではなく、「あの」タナゴなのです。そう利根川にいた本物の在来種。20数年前に、在来種のタナゴは霞ヶ浦周辺に住む人々に委ねられた。そして、そのタナゴたちは利根川へ戻ってくる!

S: だけど何はともあれ、タナゴは利根川に住むための場所が必要でしょう。何世紀にも渡る利根川流域に生息するすべての種を無視した土地と河川開発のあと、利根川下流河川事務所企画課の佐藤さんは小さな魚が隠れることのできる入り江を作っている。彼は自然が帰ってきたくなくなると思うんじゃないかと思わせるほど、リアルな自然の表象をつくっているよ!

J: つまり、佐藤さんは現状を以前の状況に戻したいと思っている。タナゴがいなくなって、彼は戻って来てほしい。

S: 外来種のタナゴは出ていかないといけないの？ タナゴは食べることができる？

J: いいえ。

S: 外来種のタナゴは食べることができる。

J: いいえ。どの魚も他の魚を食べない。外来種のタナゴはすべての貝殻を占領してしまい、在来種のタナゴは繁殖する場所を見つけることができない。

S: ということは、外来種が乗っ取ってしまったということか。

J: そう。

これは現在の横利根閘門です。雄三さんがこの門についての話を私たちにしてくれました。彼は友人とここへタナゴを釣りに行く。彼らは片方の手のひらによりたくさんのタナゴをのせた方が勝ちという競争をする。つまりたくさんのせるためには、小さいタナゴを釣った方がいいのです。

S: ここの水は淡水で、門の後ろは海水。ここの水位は海よりも高い。門が開くとき、この三角が付いている門、その時にそこへ近づくと海の方へ引き込まれてしまう。

...

J: 私たちがここへ着いた時、数枚のグーグル画像の他に川については何も知らなかった。

彼らが川を動かしたこと、知ってた？

S: 彼らが？ どうやって？

J: 誰も知らない。私も知らない。

S: 私だって知らない。だけど、想像はできる。

J: 川を体験するために、私たちは守谷から犬吠埼までを土手沿いに自転車で走りました。その道中、私たちは、日本の中心部で何度か泊まったけれど、風景はとても醜く、その醜さは留まることなく、10 km先へ進むとそれは前の10 kmとまるで同じに見えました。

S: 110日間の日本。

148時間の利根川沿いのサイクリング。

そこにいること。

J: それについて話すこと。

S: ストーリー、体験や思いを蓄積すること。

J: その全てが重要だということ、またはどれも重要でないということを確認すること。

S: 表象を集め、構築することは「過程としての違いをヒエラルキーの介さない方法で理解すること」を要する。つまりそれは終わることが無く成長し続ける。それはまた、過程において私たちが果たした役割への責任を担うことも意味する(Barad in Neimanis, 3)。したがって、河川表象センターは常に川に関わる人間と人間以外の存在からのアップデートを必要としている。今日もまた。

J: 私たちがこれまでに話したこと全てのこと、または話さなかった全てのことについて、最近のものでも古いものでも、あなた自身のもしくは誰かの、ストーリー、体験談、批評、コメントがありますか？テキストを成長させるため、受け入れられるかもしれない表象に到達するために、あなた方から学びたいと思っています。地図、河童、伊能忠敬、私たち、オランダ人、私たちが言い、言わなかった全てに関するコメントを集めています。コメントはもしよければ今私たちに、でなければ紙に書いて箱に入れてください。通訳がいます！

2017.11.26

【参考文献】

Gasteren van, Louis e.a. In een Japanse stroomversnelling - Berichten van Nederlandse watermannen - rijswerkers, ingenieurs, werkbazen -1872-1903. Zutphen: Walburg Pers, 2000.

Linton, James. What is Water? The History and Crisis of a Modern Abstraction. Carleton University: Department of Geography and Environmental Studies, 2006.

Neimanis, Astrida. "No Representation without Colonisation? (Or, Nature Represents Itself)." Somatechnics, vol. 5, no. 2, 2015, pp. 135-153.

Steinbeck, John & Ricketts, Ed. The Log From the Sea of Cortez. London: Pan Books, 1964.

【謝辞】

伊能忠敬記念館
川の駅 水の郷さわら 防災教育展示
国土交通省 関東地方整備局 利根川下流河川事務所
国土交通省国土地理院 情報サービス館
国土交通省国土地理院 地図と測量の科学館
在日オランダ王国大使館
千葉県立関宿城博物館
千葉県立中央博物館 大利根分館
利根町生涯学習センター
利根町立歴史民族資料館
守谷中央図書館
柳田國男記念公苑

青木 恵之、新井 一郎、池田 哲、石井 瑞穂、石橋 征子、パス・ヴァルクス、加納 フミ、熊谷 雲炎、倉持 ひろえ、近藤健一、佐藤 礼二、シムラユウスケ、鈴木 恵、高橋 千明、田邊 芳広、カーティス・タム、鶴見 英策、朝重 龍太、外山 有菜、濱田 耕志、二見 智子、藤本 裕美子、古田 吉光、吉川 利光、河川巡視船の運転手の方々、川と共に生活するすべてのアーカスサポーターの皆様

